

ここまでの「文」が注の対象

引用の仕方と注の付け方：例

短い引用

情報の出所を示す

ピエール・サドロンは、アダン・ド・ラ・アルAdam de la Halleの『葉蔭の劇』*Le Jeu de la Feuillée*のなかで、作者とその仲間たちが実名で登場している — つまり自分自身を演じている — と指摘し、まず作者のアダン、その父アンリHenri、アダンの「右腕」でもあるリケス・オリスRikèce Aurrisなど数名が特定できると主張している¹。サドロンの言うとおりに、彼らこそ「文書記録等で名前が確認できるフランス最初の《アマチュア》俳優たち²」ということになるわけである。フェーヴルも、サドロンについて直接言及してはいないが、登場人物アダンを演じていたのはおそらく作者アダン自身であり、さらに、劇の舞台となっている場所（劇中の場）と劇が演じられている場所（現実の場）とは同じだった可能性が高いと述べている³。これは、すでにグレース・フランクが指摘していたことでもあった。

長い引用

ウォルトンが適切にも推測したように、おそらくこの劇では、俳優のほとんどはそこに登場する人物たちで、自分が演じていないときは観客の間に座っており、必要ときだけ演技の場に出て行ったのだろう。いずれにせよ、俳優と観客の関係は非常に緊密だったにちがいない。演技の場は、さまざまな人間たちが集まるには格好の場所である、プティ・マルシェの中か近くにある居酒屋の入り口という設定だったと思われる。ウォルトンによれば、劇は夜、まさに仙女たちが現れるはずの時間に行われ、ドゥーシュ夫人 [ドゥース夫人] とその仲間たちが別の場所で仙女たちを待つ間、仙女たちを居酒屋にやってこさせることに面白味をもたせたのだろう、ということだ⁴。

そうだとしたら、まさにこれは、登場人物とそれを演じる人間、劇の場と現実の場、劇の時間と現実の時間、虚構と現実とが奇妙に交錯するドラマというべきだろう。

補足的説明：本文に入れると話しの流れを妨げるような「補足的」説明は、注として扱う。どちらの場合も情報の出所を示したあとに付け加えているが、補足的説明だけを注とすることもできる。

¹ Pierre Sadron, « Les plus anciens comédiens français connus », dans *Revue d'Histoire du Théâtre*, 1955, I, p. 38-43. (Voir p. 40-42.)

² *Ibid.*, p. 40.

³ Faivre, « Le théâtre de la grand-place », *Le Théâtre en France...*, I, p. 51-52.

なお、マズエールは、『葉蔭の劇』を演じた俳優についても劇が演じられた「場所」についても、何も言及していない。ただ、13世紀の作品全体について、これらの作品の上演に関する具体的な事柄や、これらの作品を演じた俳優については「何もわからない」と述べているので、いまだ確証は得られていないという立場を取っているのであろう。Voir Mazouer, *op. cit.*, p. 118.

⁴ Frank, *op. cit.*, p. 229. なお、ここで言及されている Walton とは、「Walton, Thomas. 'Staging *Le Jeu de la Feuillée*', *MLR*, xxxvi (1941), 344-50. [Frank の List of Books より]」のことである。